

本日は「畜魂祭」という行事を行いました。なぜ、こういう行事を行うのか考えてみてください。

かつて、宮崎県で口蹄疫が流行した時、児湯郡内のすべての牛・豚が殺処分されました。私はその時、県庁で仕事をしていたのですが、周りの人から「心の教育・命の教育」という視点で「家畜は殺処分されて可哀想だが、健康な家畜も肉にされるために屠畜されてしまう点では同じことである。それをどう解釈・説明したら良いのか。」という質問を受けました。

家畜はいずれ肉にされて食べられますが、そのお陰で人は命を繋ぐことができます。家畜である牛、豚、鶏はすべて同じことです。畜産を専門としている皆さんは、私たちの命が「家畜のお陰で繋がれたものである」ことを考えられる人でなくてはなりません。

生産者が育てた家畜は、いずれ肉にされて消費者の元へ届けられます。将来、畜産業に就く人がいますが、畜産業は消費者が食べるための家畜を飼育する仕事です。

だからこそ、畜産を学んでいる皆さんは、家畜の命を載せて私たちの命を繋ぐということだけではなく、その先のことまで考えられる人でなくてはなりません。

家畜の命を戴き繋いだ命で何をするのかということです。私はそろそろ引退する年齢に近づきましたが、皆さんはこれからの社会をつくる人です。家畜の命をいただき繋いだ命を「悪いこと」に使うのか、家畜の命をいただき繋いだ命を「世の中の役に立つこと」に使うのかということです。

本日は私たちの命をつないでくれた家畜の魂に感謝し、慰める行事でした。家畜の命をいただいて、社会の役に立つ人になれるよう頑張ってください。

令和6年7月1日

宮崎県立都城農業高等学校  
校長 山下 勉